

仏教企画通信

42号

発行日:平成 28 年 1 月 1 日

発行所: 有限会社 仏教企画
〒252-0113
神奈川県相模原市
緑区谷が原 2-9-5-5
Tel.042-703-8641
Fax.042-783-0989
発行人: 21世紀の仏教を考える会代表
(有) 仏教企画代表
藤木 隆宣
E-mail fujiki@water.ocn.ne.jp

戦後七〇年に憶う(2)

— 宗教界の動きなど —

駒澤大学名誉教授 佐々木宏幹

はじめに

太平洋戦争後七〇年もの間、平和が続いたということは、今の日本人の多くにとっては当たり前のことかもしれないが、それ以前のこの国の歩みを知る者にとっては大変な出来事なのである。

前号にも記したように、私の幼少年期つまり一九三〇年生まれの際が一歳のとき(一九三二)に満州事変、七歳のとき(一九三七)に日中戦争、そして一歳の年に太平洋戦争が始まったのだから、私の幼少時代はまさに「戦争時代」であった。一五歳(一九四五)の年の八月一日に戦争終了、というよりは「敗戦」である。私が小学校に入った年の七月七日に盧溝橋事件、日中戦

争勃発であるが、小学一年生の心に「戦争」がどう響いたか、まったく記憶にない。

しかし小学二、三年生以降の出来事は比較的よく憶えている。クラスを挙げて出征兵士を見送るため駅までよく出かけたからである。

各家庭の父や息子にある日突然「召集令状」なるものが来た。べらべらの赤い紙であったから「赤紙」と呼ばれていたように思う。

赤紙が届いた家は名誉な家とされていたが、息子とく一人息子を国家に捧げることになった母の心情はいかばかりであったか、幼い私には分からなかった。本当は悲しかったに違いない。

令状が届けられてから本人が発発するまでの時間は短かったようで、当の若者は神・仏参りや挨拶廻りで多忙を極めたようであった。



戦後七〇年を回顧する新聞・テレビを目にすると、結婚して間もない人が召集されて戦地に行き戦死、遺された妻が決して父の顔を見ることがない赤ちゃんを産んだという話が少なくない。

出征兵士を送る小学生たちは、先生の指導で日の丸の旗を作った。三、四センチの篠竹に日の丸を印刷した和紙を貼り付けたものだ。

兵士が発つ駅までは軍歌を歌いながら歩いた。「天に代わりて不義を討つ忠勇無双のわが兵は 歓呼の声に送られて今ぞ出で発つ父母

一、戦時と宗教者

一九四一年(昭和十六年)二月八日に太平洋戦争が開戦した。このとき小学五年生であった私はラジオで放送された開戦の文言を耳にした。「帝国陸海軍は本日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦斗状態に入れり」

の国 形は生きて還らじと誓う心の勇ましき」などその一つである。

当時の小学校は尋常高等小学校と呼ばれ、尋常小学校が六年、高等小学校が二年であった。高等小学校の生徒は何となく大人ぶっていて、先輩面をしており、後輩たちを苛めたりかわいがったりした。

くだんの軍歌は小学校の先生から教わったというよりも、先輩たちから仕込まれたのではないかと思う。私は今でも歌える。

駅では召集された兵士が挨拶し、集まった大勢の人たちの「万歳、万歳」の声に送られて駅を発った。その前後に大声で歌ったのが次の歌である。

「わが大君に召されたる 命は光栄ある朝ぼらけ 讃えて送る一億の 歓呼は高く天を衝く いざゆけ兵日本男子」
社会の「空気が」 「雰囲気」は確実に「戦争」に変わっていった。

という、あまりにも有名な大本営発表である。今でも耳に残っている。

ハワイの真珠湾を奇襲攻撃した海軍航空隊が大戦果を挙げたというのである。そのとき小学校の校長先生や受け持ちの先生が何を語ったのか、

どういう訳かまったく記憶にない。

ただ一二月の一日か一二、三日頃だと思いが、お寺で法要があり、当時説教が旨いことで知られたS師が「戦争が始まって今までモヤモヤしていたものが取り去られて、すっきりした」と滔滔と述べているのを、後ろの方で聴いて憶えている。

このことは仏教界が総じて大戦に賛成であったことをよく示していると言えよう。

宗教新聞として知られる「中外日報」が「戦後七〇年 宗教界の動き」と題する特集記事を掲載しているの、興味深い箇所を引用しながら私見を述べてみよう。

「中外」紙は、「日本の宗教界の大半が戦争遂行に協力した」とした上で、そのなかにあって反戦・平和を唱え弾圧された宗教者がいたことを特筆している。

その人は岐阜県の大谷派僧侶、竹中彰元師(一八六七～一九四五)である。

師は開戦後「戦争は罪悪だ」と訴え、裁判で有罪となった。師は哲学館(現東洋大)や真宗大学(現大谷大学)などに学び、若くして布教師として全国的に活躍した。日露戦争では旅順のロシア軍降伏を祝う漢詩を作ったが、日中戦争が始まった一九三七年、

兵士を見送る際に「戦争は罪悪であると同時に人類に対する敵であるから止めたがよい」と訴えた。その後も日中戦争

は中国への侵略と考えると述べ強く反対したので、三七年一〇月に陸軍刑法違反で逮捕された。

これにたいし門徒たちは「嘆願書」を出したが、禁固四月執行猶予三年の有罪判決を受け、宗派から布教師の資格を剥奪された(二〇〇七年に処分撤回)という(「中外日報」二〇一五・七・三一)。

竹中師は勇気ある硬骨漢であったと思う。

一般に時の大勢に順応し賛同して生きることは楽である。大勢に異を唱え、どこが問題を指摘し、みずから正しいと考えることを主張しかつ歩むことには相当の覚悟がいるであろう。

自分一人だけのことではなく、家族や縁者をも引き摺り込むことになろうからである。ことにこの国ではルース・ベネディクトの『菊と刀』(一九四六)が指摘するように「恥」の文化が長い間支配的であり、人びとの行動を少なからず規制してきた。何事にも物怖じしないように見える今日若者たちも「ああ恥ずかしい!」の語を連発するではないか。

日本社会はなお個人的信念を貫き通して生きるのに楽なところではないように見える。人びとは現に空気「雰囲気」をかなり気にしながら生きていくのではない。

だから竹中師は立派な人に見えるのである。

一、終戦の詔勅と天皇

昭和二〇年（一九四五）八月一五日に太平洋戦争は終結した。

その日は暑い晴れた日であり、中学三年生の私は気仙沼市（当時は町）に移設されていた日本造船の工場でベニヤ板製の舟艇造りの作業をしていた。朝礼の折に先生から、正午に重大放送があるから事務所の前に集合するように告げられた。

正午にラジオの前に集まると天皇陛下の玉音放送があるようだということで、皆緊張気味であった。

耳にしたのは昭和天皇の「大東亜戦争終結に関する詔書」の朗読であった。はじめ聞く陛下の生のお声であった。

「朕深く世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ、非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ、茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告グ。朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ……」に始まった。

今月でもよく引用されるポツダム宣言受諾の詔書である。陛下のお声はやや甲高く抑揚に富むものであったが、ラジオの雑音が多く、よく聴きとれなかった。ただ、今もよく引用される

「堪へ難キヲ堪へ忍ビ難キヲ忍ビ、以テ万世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス……爾臣民其レ克ク朕方意ヲ体セヨ」の部分にはよく記憶に残っている。後に何度も耳にしたせいだろうか。

なにしろ天皇は別格の存在であり「現人神」、生きている神であったから、その生のお声を聞くなど考えられないことであった。

小学校の校長先生が天皇について話す際には必ず「畏れ多くも（恐れ多くも）」と始まる。すると生徒は一斉に身を引き締めて不動の姿勢をとった。少しでも遅いと先生にひどく叱られたものである。

今日では両陛下がお年寄りの施設などを訪ね、迎えた人びとと言葉を交わすときには、みずから床に膝をつかれることがあるが、昔はとても考えられないことである。陛下の車が前を通るときには最

敬礼であったからだ。

ところが見るなど言われると見たくなるのが人間であり、いわんや子供においておやである。御料車が前を通る瞬間にひよつと顔を上げて見たりすると、後で大目玉を食うこと必定であった。

敗戦後、昭和天皇が人間宣言をされたのだから、今や天皇は現人神ではなく、同じ人間であると理屈の上ではなるう。

他面天皇は国民統合の「象徴」であられる。「国民統合の象徴」とは何か。この問題ははまだ完全に解けていないのではあるまいか。

口うるさい評論家たちもこの問題を突き詰めることにはためらいがあるようである。

両陛下御自身の意識は別として、国民一般の意識の中には天皇という存在自体に通常ではないもの、強いて記せば「聖性（なるもの）」が潜在するのではなからうか。

戦後七〇年、この意識は概してそう変化しているとも思えない。

このことは宗教界全般についても言えるのではないか。



大勢として天皇制と共に歩んできた観がある。端的に言えば大勢順応である。「中外日報」の記事を借りよう。

同紙は「戦時態勢に突き進んだ昭和初期以降、天皇の神聖化や日本の優越性を唱える国体観念も先鋭化した。この動きは仏教教団の教義解釈にも影響を与え、国体観念によって理論づけられた「皇道仏教」や「戦時教学」が形成された」と述べる。

どういう動きをしたのだろうか。

本願寺派は親鸞聖人の著書などに不敬と見なされる字句があるとこれを削除し、加えて聖人の神祇不拜の教えに反して、宗門寺院に神宮大麻を奉安するよう指示を出した。これを支えたのが「真俗二

三、わが過去を省みて

戦時中や敗戦時に大学や研究所、とくに仏教・宗教関係の職場に職を得ていた人たちは、どのように身を処したのであろうか。

前述の事柄とも重複する点もあるが、反省をこめて記したい。

私がお世話になった駒澤大学が二〇〇二年（平成一四）に出版した『駒澤大学百二十年』には懐かしい数々の写真が掲載されているが、その中に「昭和一六年（一九四一）ころ 教職員の集合写真」というのがある。一〇名の教員が横に並んで坐しているが、ど真中に一際目立つのが当時

諦」の教説である。浄土真宗では「俗諦」を国法・王法と理解してきた歴史があり、「王法遵守」の優先が説かれた。

王法遵守について赤松徹真氏（龍谷大学長）は「現実の国や社会に無批判に即応・対応すること、国策としての戦争が起これば、それに組み込むことが真宗門徒として正しい生き方ということになった」と指摘している（『中外日報』）。

これを見ると戦時中の日本仏教は、大勢として時の流れに逆らうことなく便乗し、更に積極的に戦争に加担したことが分かる。

の文部大臣荒木貞夫陸軍大將である。両側に並んでいる教授先生方の中には後に学長・総長になった方も写っているが、思いなしか冴えない。権力者に屈しているようにも見える。

荒木氏（一八七七～一九六六）は「第一次近衛内閣の文相として軍国主義化を推進。敗戦後A級戦犯として終身禁錮刑」（『広辞苑』）となった人である。

太平洋戦争開戦の年に撮られたこの写真は、いみじくも当時の「空気」をよく表しているように思う。「五戒の第一は不殺生戒であ

り、五戒を破る可能性のある軍隊には行きません」などと言える状況ではなかったであろう。

結局、聖職者も一般人も時の勢いには抗し得なかったのである。それどころか戦争を鼓吹することにさえなったのである。

私は大学の有名教授が戦時中は好戦的な文章を書き、戦後は仏教ほど平和を説く宗教はないと述べ、キリスト教を批判していた姿に唾然としたことがある。

とは言え、しからばお前はどうかと問われたら、私はかく対処すると断言する程の自信はない。

戦後七〇年、世の中は何となく「きな臭さ」を増してきた。国会の議論を見ていると、武力行使と武器使用は違ふとか、後方支援は武力行使とは異なるとか論じ合っている。

何か戦争のとは口にあるような感さえる。作家の半藤一利氏は戦中戦後社会についてのよき語り手であるが、現代の社会は「閉鎖的同調社会」になりつつあるのではないかと警告している。それは「集団からの圧力を感じとり、無意識的に自分の価値観を変化させ、集団の意見と同調していく。その方が楽に生きられるから」だという（『毎日新聞』二〇一五・六・八）

若い世代とくに仏教者に望みたい。戦前、戦中の先輩たちの徹を決して踏むなかれと。

ネルケ無方師インタビュー

生きる意味を求めて釈尊、禅に出会う

聞き手・藤木隆宣

坐禅をしてはじめて見えてきた世界

【藤木】ドイツ人でいらっしやるネルケさんが坐禅に惹かれるようになった理由、というところからお話しただければと思います。

【ネルケ】坐禅と出会ったのは十六歳の高校生のころです。私の高校に坐禅のサークルがあって、その先生に誘われたのが最初です。そんなものには興味がないと断ったんですけど、先生は、今までにやったことがあるのかと聞く。いや、今までもやったこと

とはなし、これからもやるつもりはないと言うと、先生は、それはおかしいじゃないか、一度やってみないと、嫌いか興味がないとか言えないじゃないか、と。そう言われて、一回でやめるつもりで坐禅してみたら、結局、毎回参加するようになってしまっ

た。何で坐禅にはまったかといいますが、まず坐禅して初めて、首より下の自分に気付いたわけです。それまでは学校の授業中

でも、いつもロダンの「考える人」のような曲がった姿勢で、あるいはそっくり返って先生の話を聞いた

たりしていました。その姿勢は悪いと注意されても、姿勢が悪くたって何が悪い、先生の話をちゃんと聞いていれば、あるいはテストでいい点数を取れば何の文句

もある、というのが私の反論だったんです。ところが、坐禅し

て初めて、姿勢が変わると自分が変わると気づきました。腰が入って背筋が伸びて、そ

れで十分、二十分坐っただけで、全然違う世界が見えてくる。また、それまで自分はど

こにいるのかと聞かれたら、頭の中に自分があると答えた

と思うんですけども、首より下を切ってしまったところに機械を付けて、人工的に脳み

そに血液と酸素を送ることができれば、それでも私は変わ

らばらと降っている雨の音に気づく、ちゅんちゅん鳴いている雀の声に気づく、普段気づいていない虫の声が聞こえてきます。ですから、坐禅をやったって意味がないと、興味がないままに半分だまされた気持ちでやってみたら、それまで思ってもみなかつた全然違う世界に気づいたわけですね。

そうやって一年間、毎回坐禅の会に参加していたら、その先生が退職するとい

います。後任の先生が見つからないらしくて、サークルを続けるために君が責任者としてやってくれないかと言われた。そう

言われても、何も知らない高校生ですから、慌てて町の図書館に行つて、片っ端から仏教の本、禅の本を借りて読んだ。そこで初めて、釈尊の話

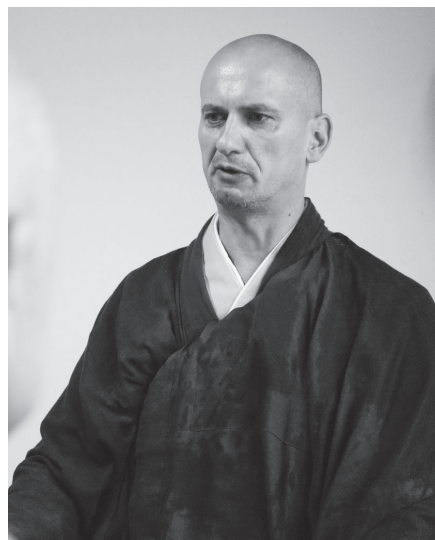
を知りました。二千五百年前、インドで若い王子として何の自由もない生活を送っていたが

ら、生きることは苦しいと、この苦しみはどこからきているのかという問題意識から出家な

さつて、菩提樹という木の下で坐禅を組んで、その答えを求めたということです。

釈尊に出会って人生の意味に気づく

【ネルケ】この釈尊の話に、私はまず衝撃を受けたんです。それはなぜかといいますが、私は七歳の時に母親を癌で亡くしました。小学校一年



が知られて、師匠から弟子へと代々、坐禅という実践がインドから中国、中国から日本に伝わった。そして鈴木大拙師の本で、今でもちゃんと禅の教えを伝えている師匠が日本にいるということを知って、高校を卒業したらすぐにでも日本に渡つて禅僧になりたいと、そのころから思っていたんです。

人間は生きなければいけないのか。人生の意味は何だろうか、と。

当時はまだ、父親というの

は何でも知っていると聞いていたので、父に人生の意味を聞いた。そうしたら、困った顔を

して、そういうことは学校の先生に聞いてみなさいという。学校の先生も答えてくれな

かった。それは、中学生、高校生になってから勉強するんだよとい

います。けれども、どうも答えてくれる大人たちも本当は分か

っていないので、周りの仲間にも話をする、みんな、おまえは変なやつだなと言わ

り、五年後にまたドイツに戻つて別のことをやりたくなるかもしれない。その時いつでも就職できるよ

うに、まず資格を身に付けなさい。大学に入

て、そこで学んでからでも遅くない。こんなことを言われ

た。再びこの先生に説得され

た。そして、ベルリンの大学に

入りましたが、二十二歳の時に一年間休学して京都に

来たんです。

【藤木】その最初の先生はドイツ人でしたか。

【ネルケ】そうです、ドイツ

人です。



安泰寺方丈の間・ネルケ無方師

戦後ドイツにおける禅の布教事情

【藤木】 そのときはまだ中川正壽老師はおられなかった。

【ネルケ】 いえ、中川老師は既にいらしたんですが、最初にドイツに禅を紹介したのはヘリゲル——もちろん、それより前に鈴木大拙師の英語の本があり、それはドイツ語にも訳されていますけれども、このヘリゲルという人の『弓と禅』が有名で、これは日本語でも出版されていますね。

ヘリゲルは第二次世界大戦中に日本に行きましたが、同じ時代にやはり日本に滞在して、戦後ドイツに戻った、カール・フリード・デュルクハイムという人がいます。

デュルクハイムはあまり日本では知られていませんが、彼は禅といろんな、今でいえばポディーワークというか、ヨガのような体操などを結びつけて、南ドイツの黒い森という地方でいわばリトリートセンターをつくった。私の先生は主にそこで学んでいました。それから、クリスチャン禅というのもあって、これももともとドイツ生まれで戦後日本に帰化した、愛宮ラサルという人が中心になってつくったものです。私の高校の先生は、このクリスチャン禅も学んだ。

愛宮ラサルはイエズス会の宣教師として一九二九年でしたか、初めて来日、終戦の時は広島において被爆するわけですけれども、生き延びて

戦後は神父でありながら坐禅の修行をした。キリスト教をやめたわけではなく、最初は発心寺の原田祖岳さんのところで、その後は安谷白雲さんの下で、それから鎌倉の山田耕雲さんのところで修行を終えて、禅マスターと認められています。日本でも活躍しながら世界中を旅して、ドイツでも毎年接心していただきます。

【藤木】 そうでしたか。そうすると、ネルケさんは京都に来られてから、いかがなさいましたか。

【ネルケ】 京都の近く、園部に昌林寺という寺があって、その当時、奥村正博さんという方がそこで毎月英語で提唱をして、接心をされていました。その接心に平成二年の四月から毎月参加して、平成二年の夏休みも昌林寺で過ごし、秋には本来なら京都の大学に戻って再び留学生として学ぶ予定だったんですが、奥村さんと相談して、本格的に禅の修行やりたいんだったら日本の海（兵庫県美方郡）に安泰寺というところがあるから、そこでやったらどうかと勧められた。そのご縁で、今から二十五年前に初めてここ安泰寺に来たわけです。

【藤木】 今お話の奥村師の昌林寺ですか、これは曹洞宗ですか。

【ネルケ】 曹洞宗です。



禅に出会わなければゲームのデザイナー

【藤木】 ネルケさんの少年時代の夢といえますか、坐禅に興味を持たれる前は、将来何になりたいとか、どういう仕事をしたいとかいうお考えはありましたか。

【ネルケ】 私はゲームが好きだったんです。ゲームといっても、今のようにはコンピューターとかスマホでやるのではなくて（また当時はパソコンもあまり発達していなかった）、ロールプレイングゲームというものでした。みんなで食卓を囲んで、一人がゲームマスターといって迷路のような地下街世界をデザインする、ほかの人たちは、例えば魔法使いとか、小人とか、忍者とか、いろんな人たちを演じるわけです。で、その地下街世界に潜ってみて、トンネルを右に曲がるとそこに龍がいてそれと戦うとか、落とし穴に落ちるとか、今だったら全部コンピューターでやりま

すけれども、そういうのをあらかじめ紙に書いて、シナリオみたいなのを作って友達と遊んでいた。

あるいは碁盤よりもずっと大きな段ボールの上に地図を描いて、小さい駒を何百個も複雑なルールによって動かす、そういうゲームが好きだった。自分の頭の中に別世界をつくるのが好きだったので、数学にも憧れましたけれども、そういうゲームのデザイナーみたいなことはやりたかったですね。ですから、そのままいけばいざれかはパソコンにはまっていったでしょう。それより前に坐禅と出会ったので、日本に行つて三十歳になるまでパソコンに触ることはなかった。もしその出会いがなければ、多分今ごろはパソコンでコンピューター・ゲームのデザイナーとか、そのようなことをやっていたと思います。

【藤木】 お母さまは早くお亡

くなりなられたということですが、日本に来て坐禅をするということ、お父さまはどういう反応をなさいましたか。

【ネルケ】 私には妹が二人おりますけれども、父親は若いころから、私たちきょうだいは自分の好きなように生きなさいと、自分の人生だから自分で決めなさいとい

【藤木】 宮浦老師はどのような方でしたか。

【ネルケ】 安泰寺の八代目の住職ですけれども、私が最初に上山した平成二年には、ちょうど師匠が堂長になって三年たったころでした。当時は師匠も四十二歳、私は二十二歳です。私は留学生ですから、正式に雲水としてここで修行したわけではないんですが、大雨が降っている日に登ってきて、運悪く台風十九号という大きな被害をもたらした台風が通り過ぎた直後で砂利道すらなく、土砂の中をはい上がるような感じで登ってきました。

【藤木】 そうですか。それではすんなりと、認めてもらつた。安泰寺では宮浦信雄老師がお師匠さんでいらつしやいますね。

【ネルケ】 はい、そうです。

ここに着いた

らまず泥んこ風呂に入れてもらつて、蛇口をひねるとお茶のような黒い水が出たんです。風呂から上がったこの方丈に通してもらつて、お茶に呼ばれたんですが、最初に宮浦老師に聞かれたのは、「君は何

【藤木】 そうですか。それではすんなりと、認めてもらつた。安泰寺では宮浦信雄老師がお師匠さんでいらつしやいますね。

【ネルケ】 はい、そうです。

【藤木】 そうですか。それではすんなりと、認めてもらつた。安泰寺では宮浦信雄老師がお師匠さんでいらつしやいますね。

【ネルケ】 はい、そうです。



安泰寺本堂

をしにこの安泰寺に来たのか」という問いでした。「僕は仏教を学びにきました。坐禅を教えてもらいにきました」と答えると、「あほう。ここは学校じゃない。おまえが安泰寺をつくるんだ」と。とんでもないことを言われた。自分が安泰寺をつくる。師匠も、そのまた師匠から言われた言葉かもしれないませんが、それが師匠を中心とした安泰寺のスタンダードです。

おのおのが自分の修行に対する全責任を持つ。学校のようには先生から教えてもらうのではなく、ここで例えば一柱の坐禅にしても、その内容は自分次第。寝る人もいれば、覚めて坐る人もいる。内山興正老師の時代から、基本的に警察を使わない。なぜかという、警察を使うと、その警察を握っている先輩雲水や師匠のために坐るようになってしまふ。警察が回って来たから背中を伸ばしてみよう、通り過ぎたらまたふにやっとなるとか、師匠が見ているか

道しるべとなった宮浦老師の言葉

【藤木】 宮浦老師のお言葉で、ほかに何か残っているものはありませんか。

【ネルケ】 そうですね、キリスト教ですと神は一つ、その息子であるイエスを信じない、イエス以外信じてはいけません。それは厳しいものではない、それは厳しいものではない。仏教ですと、安泰寺の坐禅には文殊菩薩がいて、トイレの前には烏枢沙摩明王の

ら坐ると、見ていなければ居眠りをする……坐禅が子供のままごとみたいになってしまふ。坐禅は自分がしたくてやるはずだから、警察は本来要らないというのが内山老師の考え方です。安泰寺は自分がつくるというのは、そういう意味合いもあると思うんです。

【藤木】 それはインパクトのある言葉でしたね。

【ネルケ】 そうです、それにもまず衝撃を受けたんです。ほかにもあちこちの僧堂に顔を出してみたりもしましたけれども、多くの場合は専門学校みたいな雰囲気、ゆくゆく住職になるために、建前として雲水を演じるけれども、裏ではたばこを吸ったり、ビールを飲んだり、街に遊びにいたりとか、そういうのを目にしたから、この安泰寺は本物というか、本当に本物を求める人でなければ来ないような場所だと思った。師匠がその中心になって守っていたんです。

像がある、お風呂には跋陀婆羅菩薩ですか、お風呂の菩薩がいて、あるいは玄関には韋駄天さんがいて、本堂には本尊さんがいる。それにちよつと戸惑って、「安泰寺の本堂の仏は誰ですか」と師匠に聞いたら、「それはおまえがならなければ、どこにもいない」と。「おまえがこの本尊にならなければ、仏はどこにもいない」

と言われた。

ところが、いざここで出家得度して雲水として修行が始まると、一カ月典座の見習いをしてから、典座当番に当たるわけです。初日はうどんを作れと言われましたが、ドイツにうどんはないからスパゲティアルデンテのつもりで作ったら、硬過ぎて食べないと怒られた。次の日は「じゃあ軟らかくしてやろうじゃな」と思つて三十分ゆがいたら、おかゆになってしまった。毎日、先輩に料理のことで怒られたので、「僕は何も料理の勉強をしに来たんじゃありません、仏教の修行をしに来たんじゃ」といつてみた。横で聞いた師匠は、「おまえなんかどうでもいい！」と大声で怒つた。この「おまえなんかどうでもいい！」という言葉もまた、私にとって大きな道しるべになったんです。



沢木興道師の書

それは言われてすぐに分かつたわけではないんですよ。最初は、何でそう言われなければいけないのか、この安泰寺の本尊になる「おれ」が、何でどうでもいいのかと。でも、今となってはよく分かるんですけれども、現に今の安泰寺には十数人の修行者がいますけれども、みんながそれぞれ自分だけの安泰寺をつくつてもらっては困るわけです。

「私が安泰寺をつくる」といつても、自分のエゴ、自分の好みでつくるのではなくて、自分を手放して初めて、一つの安泰寺がみんなによってつくられるわけです。

私が責任を持って積極的に関わるという主体性も大事ですが、同時に自分を手放して、私のための安泰寺をつくるのではない。典座だったら自分が好きなものを自分のために作るのではなく、自分の好き



嫌いは置いておいて、みんながおいしく食べられるものをつくる」という言葉、「おまえなんかにして作るか」ということです。それで初めて、安泰寺がつくれるわけです。ですから師匠の、「おまえが安泰寺を

一神教と多神教、本物と偽物

【藤木】 先ほどのお話で一神教の世界から、日本のように多神教、多神仏の世界へ来られて、その辺はすつと入れましたか。

【ネルケ】 私はそんなに深くキリスト教を信じたわけではないので、それほど疑問を持つたことはありません。むしろキリスト教にない、仏がたくさんいるというところは結局、自分自身が問われているように、これは新鮮で私は好きでした。それにもう一つ、さつき申し上げた、首より下の自分を見つけたこと。

キリスト教ではやっぱり首より上というか、魂の問題です。宗教は魂の問題で、魂で神を信じて、救われるのは結局魂である、頭のとつぺんから足のつま先まで全部救われるのではなくて、魂人が死んだら魂のみが天国に行く。

仏教では、特に禅では頭の

つくる」という言葉、「おまえなんかにして作るか」という言葉、この二つの一見矛盾している言葉は実は表裏一体の関係にあると、今は思っているんです。

てつぺんから足のつま先まで、この私の一挙手一投足が問題です。この体全体で仏を目指す。もちろん心も大事ですけど、もちろん体、呼吸、心、全てが仏を目指す。そこがキリスト教にはないアプローチで、私はそこが好きだったんです。

【藤木】 それから安泰寺は本物を求める人が来る場所というお話でしたが、その本物と偽物といいますが、それを分けるのはどうなさっていますか。

【ネルケ】 安泰寺には本物が来ます、本物でなければ、まずここには来ないだろうと思ふ。そうでない人を偽物と言つていいかどうか分かりませんが、要するに一つの分け方として、僧侶であるのを職業としてとらえているのか、自分の使命、生きる道ととらえているのか、がまず一つだと思ふんです。もちろん職業として、檀家さまの役に立ちたい。それは悪いことではないけれども、そうするとどうしても二十四時間全部が修行ということではなくなってしまう。寝ることから朝起きて顔を洗って食事をいただく、トイレに行くのも風呂に入るのも、もちろん坐禅も作務も全

て修行という、道元禪師が説いた修行ではなくて、お袈裟を着けて檀家の前に立っている時は坊さんだけけれども、これを脱いだらもうジャージをはいてパチンコ屋でも行つて、それはオフタイムだから自分のフリータイムだといふ……。それを偽物と言つていかどうか分からないけれど、ちよつと中身が違うんですね。これが自分の生きる道

安泰寺における修行のための三条件

【藤木】 そうしますと、今こちらの安泰寺には、どういふ方々が来られますか。
 【ネルケ】 三年前から、来るなら最低でも三年間滞在しなさい、というふうに新しい方針を決めました。ですから、今は割と本格的な修行がしたいという人が来ていますですね。以前はご年配の方も結構来られたんですが、ここは自

だと思つたら、裏も表もなくなつてしまふ。

ですから安泰寺では、例えばここもお酒が出る場合がありますが、隠れては飲まない。飲むならば堂々と、本来お釈迦様は禁じたけれども、たまにはこういうお酒を飲むという修行の場面もある。ただし隠し事をしない、これは大事だと思つてます。

給自足なので農作業がハードですし、冬は多い時は雪が四メートル積もります。一階の部屋は全部雪に埋もれて、かまくら状態です。バス停まで四キロですが、除雪車が入らないので雪の間は四カ月間、かんじきがないと行き来できませんし、かんじきを履いても腰まで埋もれるので、ご年配の方にはちよつと難しい。

今は十八歳から四十歳までと年齢制限を設けています。外国人も来て、実際に半数ぐらゐは外国人ですが、外国人の場合は日本語の基礎ぐらゐの学んでから来てほしいと、この三つの条件を三年前に設けた。



安泰寺書庫

なぜそうしたかといふと、それまでは短期参禅の人が多く、一週間、二週間ぐらゐ来てすぐ帰つてしまふ。冬を越す人はほとんどいなかった。冬は私とあと一人か二人で、そうすると、次の春

にはまた田植えの仕方から、ゼ口から教えなければいけません。十年間はそれでやっていまいたが、もうやっていられないと思つて、今の方針を変えたわけです。来るなら三年、十八から四十まで、外国人は日本語のいろはぐらゐは覚えてこい。

これでは誰も来なくなるかもしれないと思つたら、逆にちよつと増えました。今は十数人います、冬も大体十人ぐらゐで越しています。半数ぐらゐが外国人ですが、私のように自分の生き方、生きる意味を求めて来たり、本来の自分の在り方は何だろうというような哲学的な問題意識から、日本の文化というものに惹かれてくる人も中にはいます。さまざまに出会って、欧米で既に仏教と出会って、欧米で

「君はここで何がしたいのか」

【藤木】 そういう人たちの来られる動機や意識というものはあります。

【ネルケ】 そうですね、ただの逃げ場としてお寺をとらえていない人も、全くないわけでもないんです。中にはそういう人もたまにいますが、そういう人も一応受け入れて、ゆくゆくはそうじゃない、ここは社会に適応できない人のための逃げ場じゃないということなんです。ここに三年、五年、長ければ十年いて、それこそ瑩山禪師のように再び世に出て、お寺の住職になるといふ道もあります。あるいは、例

は通いの禅センターはたくさんありますけれども、一年中住み込みで出家という、こうした生活のできる場所は少ないので、それを求めて安泰寺に来る人も結構いるんです。

日本人の場合も似たような問題意識から来る人もいれば、今の社会の在り方にちよつと疑問を持つとか、あるいはこのまま社会人として年を取つて、四十、六十になつた時点で部長クラスまでいって退職できるかもしれない、それができるかどうかは分からない。非常に今は社会が不安定ですし、就職も難しい。だから坊さんになろうというわけではないけれども、やつぱり一般的な生き方とはちよつと違うものを求めて来る人も結構いますね。

え、ターミナルケアのようなことをやったり、あるいは安泰寺で学んだ農作業ですね、今日本の自給率は非常に低いですけれども、放置されている田んぼとか畑を再び生かして、どこか田舎で畑仕事をやる。安泰寺で学んだ知識を生かすことができます。

私としては、こうなつてほしいと、ここで三年、五年学んでからこんなことをやってほしいというのはいんです。ただ、ほかにオプションがあったから仕方なく坊さんになつたというのではなく、もう少し大きな夢というのか、何かやる気を出してほしいと

いふのはあります。ほとんどこの人は何か、そういうのはあると思えますけれども、たまに「おまえが安泰寺をつくらなければいけないのに、つくつていないじゃないか。ただ人の後ろについているだけじゃないか」と言いたくなること

でも、みんながそうだといふのではなく、三年前までは私がいちいち教えなければ戻つていかなかったんですけれども、三年たつて今は、例えば私が講演に出掛けて不在でも、大体自分たちでここを動かせるようになっていきました。

【藤木】 それは大したものです。

心の最中ですけれども、私が一炷、二炷抜けたとしても、みんな普通に坐っています。十人のうち八、九人はちゃんと自分で主体性を持ってやっていると

黙って五日坐る安泰寺スタイル接心

【藤木】 先ほど私どもが車で着きましたら、お迎えにきてくださった典座の方ですか、あの方はどちらから。

【ネルケ】 アメリカです。彼は四年目です。

【藤木】 彼は何を求めて来られたのか。

【ネルケ】 やつぱり本来の自分とか、彼は二十歳を過ぎたころからアメリカで坐禅をしていた。もともとは音楽を学んだ人ですけれども。

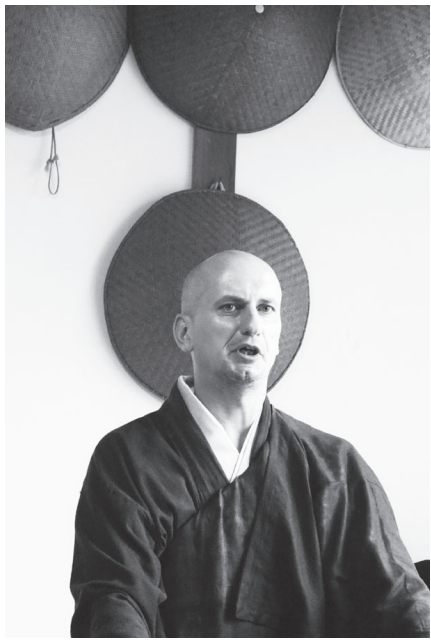
【藤木】 アメリカでは、禅センターかどこかに。

【ネルケ】 そうです。オレゴン州の禅センターに三年間ぐらゐ通つて、安泰寺をホームページで知つたと思つて、あるいは内山老師の本の英訳

も出ていますから、そこで安泰寺を知つたのか。

【藤木】 ネルケさんを慕つてという方もいらつしやる。

【ネルケ】 私はドイツで一冊本を出していますし、ドイツで何回かテレビに出たことがあるので、ドイツならば私の名前を知っている人はいます。けれども、ヨーロッパのほかに国やアメリカでは、私の名前を知っている人は少ないと思つて、むしろ内山老師、澤木老師、あるいは安泰寺ブランドですね。例えば奥村正博さんも今インディアナ州にいますが、そこで活躍して安泰寺スタイル接心といふ、要するにただ坐る坐禅、黙つて五日間坐るといふのをや



【ネルケ】まして瑩山禅師に
なると、道元禅師とまた対照
的なお方で、このお二人のコ
ラボだからこそ日本で曹洞宗
が広まったと思います。道元
禅師だけだったら、『正法眼蔵』
のような深い哲学的な著作は
今に伝わっていたかかもしれま
せんが、瑩山禅師がおられた

釈迦、道元、瑩山、一仏両祖に導かれて

からこそ、その精神が大衆
に伝わりやすい形で日本中に
広まった。逆に瑩山禅師だけ
だったら、積極的な社会活動
はできたけれども、そこに道
元禅師の深い心はなかったで
しょう。ですからそれぞれの、
やっぱり道元禅師のキャラと
いったら失礼ですけども、

道元禅師にし
かない崇高さ
はあると思い
ますし、瑩山
禅師にしか
ない包容力が
ある。
それからお
釈迦様はど
んお方だった
のか、私た
ちに残ってい

【ネルケ】 はい。釈迦に説法で
すが、曹洞宗では一仏両祖とい
いますね。お釈迦様、道元禅師
様、瑩山禅師様。このお三方は
結局同じ法を説いて、同じ法を
実践したというのが、曹洞宗
の公式な立場としてあるんです
が、どうでしょう。もちろんん
ながつてはいると思いますけれ
ども、やっぱり二千五百年前の
インドでお釈迦様が説いて実践
したものと、八百年前の道元禅
師が実践したものはひよとして
て、時代も違いますし、場所も
違いますし、微妙に違うかもしれ
ません。

ていいますから、そういうこと
でアメリカ人が安泰寺を知る
ようになるのでしょうか。
日本でも三、四年前までそう
だったんです。四年前に私の
最初の本が出てから、まず私
を本で知って、次に安泰寺を
知ったという人が増えました。
とくに若い人は、澤木老師、
内山老師をもうあまり知らな
いですね。五十歳代、六十歳
代だったら澤木老師、内山老
師のネーム・バリューはまだ
高いと思いますけど、若い人
だったら、たまたま私の本を
見たとか、テレビで見たとか、
そういう人が多いですね。

【藤木】 そういうネルケさん
にとって、お釈迦様の存在と、
それからつながって道元禅師
のことをちょっとお話いただ
ければと思います。

【ネルケ】 はい。釈迦に説法で
すが、曹洞宗では一仏両祖とい
いますね。お釈迦様、道元禅師
様、瑩山禅師様。このお三方は
結局同じ法を説いて、同じ法を
実践したというのが、曹洞宗
の公式な立場としてあるんです
が、どうでしょう。もちろんん
ながつてはいると思いますけれ
ども、やっぱり二千五百年前の
インドでお釈迦様が説いて実践
したものと、八百年前の道元禅
師が実践したものはひよとして
て、時代も違いますし、場所も
違いますし、微妙に違うかもしれ
ません。

【藤木】 そういいますね。
【ネルケ】 はい。釈迦に説法で
すが、曹洞宗では一仏両祖とい
いますね。お釈迦様、道元禅師
様、瑩山禅師様。このお三方は
結局同じ法を説いて、同じ法を
実践したというのが、曹洞宗
の公式な立場としてあるんです
が、どうでしょう。もちろんん
ながつてはいると思いますけれ
ども、やっぱり二千五百年前の
インドでお釈迦様が説いて実践
したものと、八百年前の道元禅
師が実践したものはひよとして
て、時代も違いますし、場所も
違いますし、微妙に違うかもしれ
ません。

【藤木】 そういいますね。
【ネルケ】 はい。釈迦に説法で
すが、曹洞宗では一仏両祖とい
いますね。お釈迦様、道元禅師
様、瑩山禅師様。このお三方は
結局同じ法を説いて、同じ法を
実践したというのが、曹洞宗
の公式な立場としてあるんです
が、どうでしょう。もちろんん
ながつてはいると思いますけれ
ども、やっぱり二千五百年前の
インドでお釈迦様が説いて実践
したものと、八百年前の道元禅
師が実践したものはひよとして
て、時代も違いますし、場所も
違いますし、微妙に違うかもしれ
ません。

【藤木】 そういいますね。
【ネルケ】 はい。釈迦に説法で
すが、曹洞宗では一仏両祖とい
いますね。お釈迦様、道元禅師
様、瑩山禅師様。このお三方は
結局同じ法を説いて、同じ法を
実践したというのが、曹洞宗
の公式な立場としてあるんです
が、どうでしょう。もちろんん
ながつてはいると思いますけれ
ども、やっぱり二千五百年前の
インドでお釈迦様が説いて実践
したものと、八百年前の道元禅
師が実践したものはひよとして
て、時代も違いますし、場所も
違いますし、微妙に違うかもしれ
ません。

【藤木】 そういいますね。
【ネルケ】 はい。釈迦に説法で
すが、曹洞宗では一仏両祖とい
いますね。お釈迦様、道元禅師
様、瑩山禅師様。このお三方は
結局同じ法を説いて、同じ法を
実践したというのが、曹洞宗
の公式な立場としてあるんです
が、どうでしょう。もちろんん
ながつてはいると思いますけれ
ども、やっぱり二千五百年前の
インドでお釈迦様が説いて実践
したものと、八百年前の道元禅
師が実践したものはひよとして
て、時代も違いますし、場所も
違いますし、微妙に違うかもしれ
ません。

【藤木】 そういいますね。
【ネルケ】 はい。釈迦に説法で
すが、曹洞宗では一仏両祖とい
いますね。お釈迦様、道元禅師
様、瑩山禅師様。このお三方は
結局同じ法を説いて、同じ法を
実践したというのが、曹洞宗
の公式な立場としてあるんです
が、どうでしょう。もちろんん
ながつてはいると思いますけれ
ども、やっぱり二千五百年前の
インドでお釈迦様が説いて実践
したものと、八百年前の道元禅
師が実践したものはひよとして
て、時代も違いますし、場所も
違いますし、微妙に違うかもしれ
ません。

【藤木】 そういいますね。
【ネルケ】 はい。釈迦に説法で
すが、曹洞宗では一仏両祖とい
いますね。お釈迦様、道元禅師
様、瑩山禅師様。このお三方は
結局同じ法を説いて、同じ法を
実践したというのが、曹洞宗
の公式な立場としてあるんです
が、どうでしょう。もちろんん
ながつてはいると思いますけれ
ども、やっぱり二千五百年前の
インドでお釈迦様が説いて実践
したものと、八百年前の道元禅
師が実践したものはひよとして
て、時代も違いますし、場所も
違いますし、微妙に違うかもしれ
ません。

【藤木】 そういいますね。
【ネルケ】 はい。釈迦に説法で
すが、曹洞宗では一仏両祖とい
いますね。お釈迦様、道元禅師
様、瑩山禅師様。このお三方は
結局同じ法を説いて、同じ法を
実践したというのが、曹洞宗
の公式な立場としてあるんです
が、どうでしょう。もちろんん
ながつてはいると思いますけれ
ども、やっぱり二千五百年前の
インドでお釈迦様が説いて実践
したものと、八百年前の道元禅
師が実践したものはひよとして
て、時代も違いますし、場所も
違いますし、微妙に違うかもしれ
ません。

【藤木】 そういいますね。
【ネルケ】 はい。釈迦に説法で
すが、曹洞宗では一仏両祖とい
いますね。お釈迦様、道元禅師
様、瑩山禅師様。このお三方は
結局同じ法を説いて、同じ法を
実践したというのが、曹洞宗
の公式な立場としてあるんです
が、どうでしょう。もちろんん
ながつてはいると思いますけれ
ども、やっぱり二千五百年前の
インドでお釈迦様が説いて実践
したものと、八百年前の道元禅
師が実践したものはひよとして
て、時代も違いますし、場所も
違いますし、微妙に違うかもしれ
ません。

【藤木】 そういいますね。
【ネルケ】 はい。釈迦に説法で
すが、曹洞宗では一仏両祖とい
いますね。お釈迦様、道元禅師
様、瑩山禅師様。このお三方は
結局同じ法を説いて、同じ法を
実践したというのが、曹洞宗
の公式な立場としてあるんです
が、どうでしょう。もちろんん
ながつてはいると思いますけれ
ども、やっぱり二千五百年前の
インドでお釈迦様が説いて実践
したものと、八百年前の道元禅
師が実践したものはひよとして
て、時代も違いますし、場所も
違いますし、微妙に違うかもしれ
ません。

【藤木】 そういいますね。
【ネルケ】 はい。釈迦に説法で
すが、曹洞宗では一仏両祖とい
いますね。お釈迦様、道元禅師
様、瑩山禅師様。このお三方は
結局同じ法を説いて、同じ法を
実践したというのが、曹洞宗
の公式な立場としてあるんです
が、どうでしょう。もちろんん
ながつてはいると思いますけれ
ども、やっぱり二千五百年前の
インドでお釈迦様が説いて実践
したものと、八百年前の道元禅
師が実践したものはひよとして
て、時代も違いますし、場所も
違いますし、微妙に違うかもしれ
ません。

【藤木】 そういいますね。
【ネルケ】 はい。釈迦に説法で
すが、曹洞宗では一仏両祖とい
いますね。お釈迦様、道元禅師
様、瑩山禅師様。このお三方は
結局同じ法を説いて、同じ法を
実践したというのが、曹洞宗
の公式な立場としてあるんです
が、どうでしょう。もちろんん
ながつてはいると思いますけれ
ども、やっぱり二千五百年前の
インドでお釈迦様が説いて実践
したものと、八百年前の道元禅
師が実践したものはひよとして
て、時代も違いますし、場所も
違いますし、微妙に違うかもしれ
ません。



『イタコ 中村タケ』
Itako Nakamura Take
A comprehensive audio-visual
archive and explanatory booklet
on the life of an individual itako

【オシラ遊ばせ「口寄せ」呪いまじらじなど
盲目的にイタコ中村タケが記憶する61の唱えごとを
体系的に収録しています。
すべての唱えごとを文字起こしした解説書付き。

案内 読書



音響映像 / DVD2枚 (収録時間 total/5h 47m 56s)
音声 / CD6枚 (収録内容は DVDと同じ)
解説書 / A4判変形 本文 328 p
英文概説付き。DVDテロップは英文併記。
English translation excerpts are included in the booklet. DVDs are subtitled in English.
定価：本体 18,000円 (税別)
■ 2013年 11月 10日発売
問合せなど / 発行所 (株)アドポポロ 〒543-0011 大阪市天王寺区清水谷町 15-18-102 tel.06-6765-2898 fax.06-6765-2930

【オシラ遊ばせ「口寄せ」呪いまじらじなど
盲目的にイタコ中村タケが記憶する61の唱えごとを
体系的に収録しています。
すべての唱えごとを文字起こしした解説書付き。

【オシラ遊ばせ「口寄せ」呪いまじらじなど
盲目的にイタコ中村タケが記憶する61の唱えごとを
体系的に収録しています。
すべての唱えごとを文字起こしした解説書付き。

【オシラ遊ばせ「口寄せ」呪いまじらじなど
盲目的にイタコ中村タケが記憶する61の唱えごとを
体系的に収録しています。
すべての唱えごとを文字起こしした解説書付き。

【オシラ遊ばせ「口寄せ」呪いまじらじなど
盲目的にイタコ中村タケが記憶する61の唱えごとを
体系的に収録しています。
すべての唱えごとを文字起こしした解説書付き。

【オシラ遊ばせ「口寄せ」呪いまじらじなど
盲目的にイタコ中村タケが記憶する61の唱えごとを
体系的に収録しています。
すべての唱えごとを文字起こしした解説書付き。

【オシラ遊ばせ「口寄せ」呪いまじらじなど
盲目的にイタコ中村タケが記憶する61の唱えごとを
体系的に収録しています。
すべての唱えごとを文字起こしした解説書付き。

【オシラ遊ばせ「口寄せ」呪いまじらじなど
盲目的にイタコ中村タケが記憶する61の唱えごとを
体系的に収録しています。
すべての唱えごとを文字起こしした解説書付き。

【オシラ遊ばせ「口寄せ」呪いまじらじなど
盲目的にイタコ中村タケが記憶する61の唱えごとを
体系的に収録しています。
すべての唱えごとを文字起こしした解説書付き。

仏教企画発行 の刊行物

『仏教企画通信』ご支援寺院名

所在地	寺院名	金額
福井県	妙徳寺	3000
秋田県	善龍寺	10000
福島県	普光寺	10000
静岡県	十輪寺	10000
神奈川県	宗泉寺	10000
茨城県	藤長寺	10000
鳥取県	瑞泉寺	5000
佐賀県	地福寺	3000
愛媛県	高昌寺	10000
福島県	徳成寺	10000
岩手県	長福寺	10000
宮城県	保寿寺	4000
島根県	円光寺	10000
宮城県	光巖寺	5000
静岡県	甘露寺	10000
神奈川県	松田薫	10000
静岡県	盤龍寺	5000
埼玉県	曹源寺	10000
埼玉県	西明寺	10000
静岡県	宿蘆寺	20000
兵庫県	永澤寺	10000
新潟県	永林寺	5000
青森県	大乘寺	10000
千葉県	宗胤寺	10000
愛知県	修善寺	10000
秋田県	宝円寺	5000
合計		225,000
(H27/8/1～9/25) 敬称略		

『手まり学園』寄附者ご芳名

所在地	寺院名(個人名)	金額
神奈川県	青木義次	4,000
栃木県	大中寺	10,000
東京都	砂金智佐(72)	3,000
鳥取県	瑞泉寺	5,000
神奈川県	青木義次	4,000
宮城県	光巖寺	10,000
東京都	砂金智佐(73)	3,000
合計		39,000
(H27/8/1～9/25) 敬称略		

- 「うたい継ごうよ、子守唄」 長田暁二・西館好子 対談集 1200円(※)
 - 「まんが問答 一期一話」 文/平和宏昭・まんが/垣内敬造 1200円(※)
 - 「道元禅より見たる般若心経解説」 CD付き 長井龍道 著 2200円
 - 「葬送のしおり」 長井龍道 著 30円
 - 「わが心の釈尊伝」 須田道輝 著 1800円
 - 修証義読本「生老病死」 須田道輝 著 500円(※)
 - 「曹洞宗檀信徒経典」 須田道輝 解説 300円(※)
 - 曹洞宗檀信徒必読「供養のすべて」 霊元丈法 著 140円(※)
 - 曹洞宗檀信徒必読「葬儀のすべて」 霊元丈法 著 150円(※)
- (※部数により割引があります) ◎すべて税別価格です

曹洞禅グラフ

[発行日]

- ◆春彼岸号 2月20日
- ◆夏お盆号 5月30日
- ◆秋彼岸号 8月30日
- ◆冬正月号 10月30日

1部	200円
9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

お申し込みは
 仏教企画 〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原 2-9-5-5
 TEL 042-703-8641 FAX 042-783-0989 fujiki@water.ocn.ne.jp

★ ご支援口座名 ★ (郵便局扱いです)
 社会福祉法人輝雲会 (手まり学園用) 00280-0-115818
 仏教企画 (仏教企画通信用) 00160-5-10996

編集後記

安泰寺のネルケ無方師を取材した。鳥取空港から車で一時間半位で兵庫県美方郡新温泉町久とう山に着く。国道は全く問題なかったがいよいよ安泰寺に入る道になると狭くなり小型車のレンタカーでやっとだった。

最初に出むかえてくれたのがアメリカ人のナイト無為師(30)で安泰寺に来て四年になるという。流暢な日本語で挨拶された。他にドイツと中国のハーフの女性(21)オーストラリア人女性(65)二人のドイツ人男性、もう一人のアメリカ人男性、中国人男性、アルゼンチン男性、ノルウェー人男性、日本人男性が七人で計十七人が修行している。

方丈の間に案内されネルケ師との初対面になる。

現代の生活になれている小生からは自給自足に近い生活をしながらの僧堂生活は大変だろうと思った。

台所の燃料は薪だった。小生が中学と高校生の時に過ごした寺もやはり薪だったが、時の住職が隆宣では無理と判断し二年後にはご飯は電気釜になった。五十八年前の懐かしい思い出。

安泰寺がある地域は冬は三〜五メートルの雪だそう。冬の写真を見せていただいたが、一階部分は完全に埋もれている。

小生が昭和四十二年永平寺に安居したときにもかなりの雪が降った。一月に入ると毎日雪作務公報が入り作務後の餅やアンパンがおいしかった。

永平寺の伽藍の一階部分は雪で埋まり回廊に波板をつなげ雪を下に下ろしたことを思い出した。四十六年間の気候の様変わりには驚く。

安泰寺には日本人の他に外国の方が道を求めて修行にやってくる。曹洞宗では多くが住職資格を得るために本山などに修行に行く。小生もしかりであった。

寺院住職に求められるものは二十年前位は修行力からの法供養が出来ることであった。今は法供養に加えて世間の在り様にいかに向き合える住職かである。寺院の社会貢献活動はどうするか。宗門の中で世間が期待する事柄に普通に話が出来ようにならないかならない時代が来ている。

宗門では後継者不足と地方での少子高齢化がお寺の存続にかかわる大問題になっている。

宗門の人材育成は小、中学生から始めなければならぬ。人生の目的を若き後継者が自ら見つけ、寺院を地域の拠点にできる力のある後継者を育てるべきである。

様々な課題に曹洞宗総合研究センターは取り組んで研究機関としての存在を示していただきたい。